

## タノアを囲んで

儀礼用鉢(標本番号H84912、高さ/22cm 幅/54cm 奥行/53cm)フィジー

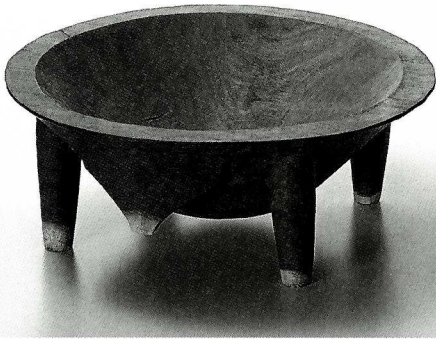
白川 千尋(しらかわ ちひろ)

本館先端人類科学研究部

表紙の写真で使われているのは、フィジーの木鉢である。見てのとおり重心が低く、鉢の部分を四本の短い脚で支える格好になっている。しっかりとした安定感がある。なかには、これよりも大きなものや脚が多いものもあるが、いずれにせよ、堅木の丸太を彫り抜くようにして作ったものが多いようである。

タノアとよばれるこの木鉢は、伝統的に訪問者を歓待する儀礼などで使われてきた。儀礼では、村を訪れた賓客に対して、村のリーダーである首長がヤンゴナという飲み物をふるまう。このときそれを入れる容器として使われるのがタノアである。首長をはじめとする村の人びとと訪問者はタノアを囲み、ココヤシの実の殻などでできた椀にヤンゴナをよそって順に飲む。

ヤンゴナは、より一般的にはカヴァという名前で知られ、フィジーの隣国のヴァヌアツやサモア、トンガ、さらにはミクロネシアのポーンペイ島などでも飲まれてきた。



コシヨウ科植物の根から搾り出した液体は一見すると泥水のように、苦み走ったその味は漢方薬のようでもある。

かつては「カヴァ酒」と紹介されることもあったが、カヴァは酒ではなく、アルコールの作用とは正反対の沈静化作用をもたらす。酒を飲み過ぎると興奮して喧嘩を始める人がいるが、そんな厄介な人でもカヴァをたくさん飲めば、静かになつてやがては眠り込んでしまうだろう。そうした作用をもつこともあつてか、ヴァヌアツでカヴァは争いの調停や和解の際にも飲まれ、平和と友好の徴と目されてきた。隣国の例とはいえ、そのようなあり方を思い浮かべるならば、タノアを囲んで村の人びとと訪問者がヤンゴナをともに飲むという先のフィジーの儀礼も、理に適ったものであることがわかる。